8/29 朝日

亡き母の名 呼び続けた祖父

会社員　（東京都　28）

祖父は海軍士官だった。今年2月、91歳で亡くなった。戦争のことを直接話してくれたことはなかったが、私には戦争が人の心をどれほど傷つけるものか痛感するできごとがあった。

祖父は海軍兵学校に入った。入学が決まった時、母親は終始無言だった。終戦後、祖父は戦地からすぐには帰還できなかった。母親は近所の人たちの「息子さんはお国のために亡くなったのだろう」というわさに心底ショックを受けた。体を悪くして、1945年8月末に亡くなった。

祖父が帰還したのは翌月だった。母親の葬儀は終わっていた。

戦争は、様々な形で人を苦しめる。殺してしまうこともある。終戦から年月が経って年を取ってからも、祖父はときおり、誰もいない部屋で生みの母の名前を呼んでいた。母を探すような、寂しそうな声だった。聞いた私も寂しくなり、親子の別れを阻んだ戦争に憤りを覚えた。

戦後70年になっても、当時の体験で苦しみ続けている人がいる。これからの社会を担う私たちは戦時を生き延びた人たちの体験をもっと聞きたい。積極的に過去に学び、語り継ぎたい。

安保法案廃案へ できる限り

主婦　（兵庫県　69）

安全保障関連法案に反対するためのデモや署名活動を行っている「戦争をさせない1000人委員会」に参加している。

先日、英語版の署名用紙を海外の友人15人に送ったら、クエーカー教徒の友人は5人分の署名を集めてくれた。また、私が15年前に米国旅行して以来の友人で「婦人国際平和自由連盟」（WILPF）の会長だったカナダ人のブルーナ・ノタさんは電話で激励してくれた。

一方、ある米国の友人は「なぜ米国や英国を助けないのか」と電話で尋ねた。私は「日本は戦争放棄の憲法9条を持つ国で軍事的には助けられないが、ほかの方法で平和のために働く」と答えた。また「過去を忘れないために」と、友人は太平洋戦争で旧日本軍の捕虜になった米国の元五輪陸上選手の半生を描いた映画「アンブロークン」を私に勧めた。私も最近見たベトナム戦争のドキュメンタリー映画「ハーツ・アンド・マインズ」は良い映画だったと伝えた。活動への反応は様々だ。

30日には、「戦争法案」廃案と安倍政権退陣を訴える全国100万人規模の大行動に参加するため、国会前に行く。憲法9条は世界平和に貢献できると信じて、私にできることを精いっぱいやっている。